

与謝蕪村が受容したもの—牡丹を詠んだ句を手がかりとして What Buson Accepted —Using the Hokku of Peony as Clues

蔡 麗文
CAI LiWen

Abstract: The peony, called the “King of Hundred Flowers”, was actively taken up as a season word in hokku. Yosa Buson, a painter and hokku poet in the Edo era, composed many hokku about the peony. It was speculated that hokku of the peony composed by Buson who had a discerning eye for a painter, might have a unique way of drawing. This paper has clarified the peony that has been composed in Buson’s hokku, by comparing and examining the phrase of peony composed in Waka (Japanese poem) and in hokku. It also reveals what Buson accepted, using the hokku of peony as clues.

Keywords: Buson, Hokku, Chinese poetry, Pictures on (room) partitions, Nanga, Buddhism, Penoy
蕪村、発句、漢詩、障壁画、南宗画、仏教、牡丹

1. はじめに

「百花の王」と呼ばれる牡丹は、富貴の象徴として中国を主として東アジアで古くから愛好されてきた。和歌にあまり詠まれてこなかった牡丹は、発句で季題として積極的に取り上げられるようになった。江戸時代の画家であり俳人でもあった与謝蕪村は牡丹の発句を多く詠んでいる。画家の目を持つ蕪村が詠んだ牡丹の句には、独特な描き方があるだろうと推測された。本論では、和歌と発句で詠まれた牡丹の句の比較考察を端緒として、蕪村の発句で詠まれている牡丹の特質を蕪村が受容したものから明らかにする。

2. 先行研究との関連と本論の意義

藤田真一は『蕪村・俳諧遊心 近世文学研究叢書』で、蕪村だけではなく、同時代の俳人の牡丹の作を挙げて、江戸中期俳壇で牡丹が注目された理由を述べている。本論では、牡丹が盛んに詠まれるようになった理由を踏まえて、蕪村一門の牡丹ブームによる蕪村の弟子と門人の牡丹句の考察を進める。

また、『日本文学研究資料叢書 蕪村・一茶』では、蕪村と中興俳壇、蕪村の離俗論¹と蕪村

¹ 蕪村は門弟召波の『春泥句集』（安永六・一七七七年）に寄せた序文の中で、離俗について次のように記している。

「俳諧は俗語を用て俗を離るるを尚ぶ、俗を離れて俗を用ゆ、離俗ノ法最かたし。」

蕪村のいう離俗とは、「俳諧に用いられる言葉は、貴族が詠む和歌に用いられる詩語のような雅語ではなく、だれもが日常に使う平易な俗語でなければならない」ことであり、「しかも俗を用いながら俗を離れなければならない。」のである。

にかかわる俳人という面から蕪村について論じられているが、この中で、高橋庄次は「蕪村の詩論」の一節で、蕪村晩年の作品風格を「新奇壯麗」と論じ、蕪村の離俗論に近接すると結論づけている。本論では、『新花摘』（安永六・一七七七年）に収録された十二句の牡丹連作から、句の創作と離俗論とのかかわりを検討する。

寺山広は『和漢古典植物考』で、文化史の視点に立って、牡丹の原産地、日本への渡来のルートと年代、及び和漢名の起源を始め、和歌や発句に登場する例を解説している。本論では和歌と発句での牡丹の取り上げられ方の違いを明らかにする。

季語としての牡丹の考察は、小林祥次郎の『季語遡源』で、『万葉集』から江戸時代にまで牡丹が季語として定着する経緯が明らかにされ、特に発句における牡丹と猫、蝶、夏の月との組み合わせからの連想について論が展開されている。本論ではこれを踏まえて、牡丹と猫、蝶などの組み合わせについて絵画との関連から考察を加えたい。

蕪村の作品に関する研究は句、俳論や画などいずれのカテゴリーでもかなり進んでいるが、蕪村の発句における牡丹の句を全面的に整理し、考察する研究はまだなされていない。漢詩文の影響を受けた面から蕪村における牡丹の句の研究には藤田があるが、絵画の面からの研究に欠けている。本論は先行研究を踏まえ、漢詩文や絵画そして仏教の面から牡丹の句を考察する。この点で有意義である。

3. 牡丹について

蕪村の牡丹句を考察する前提となる中国での牡丹、日本での牡丹受容史や画題としての牡丹について要点を整理すると次のようになる。

中国では特に唐の時代以降、牡丹の栽培と鑑賞が盛んになった。唐の時代に玄宗と楊貴妃が牡丹を楽しみ、李白が「清平調詞三首」で楊貴妃の美しさを牡丹に喩えた逸話は広く知られている。「穠艶²」な牡丹に喩えられた楊貴妃は、肉感の豊麗を持つ美女である。この豊麗さは牡丹の美と重なっている。そして、宋代から牡丹は花の王と称された。

日本では平安時代初期に薬用植物として渡来し、江戸時代から牡丹が庭園で栽培されるようになった。画題としての牡丹は牡丹の花のみならず、蝶や猫など、牡丹の「富貴」に加えてさらに吉祥の意味合いを強調するモチーフと組み合わせられ、画題としても多様な展開をみせた。

韻文学における牡丹の位置づけとしては、和歌に詠まれた牡丹と、季語としての牡丹について、次のようにまとめることができる。和歌での「牡丹」は、ただ掛詞として使われていて、牡丹そのものが詠まれているのではない。初期俳諧における牡丹の句では、深見草などの伝統

² 国民文庫刊行会編『続国訳漢文大成 文学部第三冊 李太白詩集 上の三』、国民文庫刊行会、昭和三年、四九九頁、
清平調詞・其の二・一句目

「一枝穠艶露凝香 一枝の穠艶、露、香を凝らす。」

詩意：一枝穠艶の牡丹が暁の露を帯びて、香を凝らす時に当つては、又一しほである。花、すでに此の如く、人も亦た知るべしである。

的な異名はもう使われなくなったが、季語としての牡丹は、まだ、和歌以来の掛詞と同様の詠み方にとどまるものであった。江戸中期になると、牡丹の句は、牡丹を自然の存在として見るものになってきた。特に蕪村の牡丹句には、花そのものを詠んでいることが顕著に見られる。

4. 蕪村の発句における牡丹

蕪村が詠んだ牡丹には、眼前の牡丹があり、画題から誘い出された牡丹があり、空想によって捉えられた牡丹もある。これらの句では、牡丹の伝統的な異名にこだわることなく、富貴な花という伝統観念も超越している。

蕪村の牡丹句の源泉について、次のように分類し、その描き方に着目して、漢詩、絵画と宗教から、どのような影響を受けたかについて探りたい。

4-i 牡丹の句における漢詩文の受容

蕪村の句では漢語の使用が目立つのであるが、その傾向はなかでも牡丹の句において著しい。そして、蕪村は漢詩文を典拠とするだけではなく、漢詩文の翻案もしており、蕪村が当時流布していた漢詩文集を広く読んでいたことが推測される。例えば「広庭のぼたんや天の一方に」(『五車反古』)という句は、蘇東坡の「前赤壁賦」と関係が深いとされているが、江戸時代の和刻本漢籍の流通状況を考えると、蕪村の「天の一方」句は蘇東坡の「前赤壁賦」だけでなく、『玉台新詠』³と『文選』⁴などを踏まえて複数の漢詩の影響を受けて作られた作品であろう。漢詩での「天の一方」には、遠く離れているの意味を含んで、蕪村の句の「天の一方」はこれらの作品の意を取って、先人に見劣りしない作品を作り出したのである。

4-ii 牡丹の句における障壁画の受容

「金屏のかくやくとして牡丹哉」(『新花摘』)から、障壁画の受容について考察を加えたい。「金屏風」と「牡丹」との組み合わせは狩野山楽の「牡丹図襖」を思わせる。「牡丹図襖」では金地に映える堂々とした牡丹が咲く様子が描かれている。蕪村の句で、「かくやく」とは、まばゆく輝いている様子を意味し、上五の「金屏」と下五の「牡丹」の両方を形容している。「金屏のかくやく」と「かくやくとして牡丹」とは別々の物ではなく、一つの全体になっている。光り輝く金屏風は背景だけではなく、牡丹の豪華な美を引き立てる役割を果たしている。蕪村の句が詠じた金地に描かれた牡丹の画面は金碧障壁画の牡丹図からのものであろう。

4-iii 牡丹の句における南宗画の受容

「ぼうたんやしろがねの猫こがねの蝶」から、南宗画の受容について考察したい。「牡丹・

³ 内田泉之助『新釈漢文大系六十 玉台新詠(上)』, 昭和四十九年二月, 明治書院, 五五二頁。
卷九・悲愁歌・一句目

「吾家嫁我兮天一方 吾が家我を嫁がす天の一方」

詩意: わが家は我身を天涯はるかの地に嫁せしめた。

⁴ 川合康三ほか訳注『文選』, 平成三十年二月, 岩波書店, 岩波書店, 二六八頁。
卷二十九・詩四首その四・六句目

「良友遠離別 各在天一方 良友遠く別離し 各各天の一方に在り」

詩意: 良友と遠く離れて、各々天の一方に住む身となる。

猫・蝶」を題材にした絵画は多い。「牡丹」と「猫」との組み合わせは「富貴耄耋」という富貴長寿の意味を持つ。「蝶」は『莊子』にある、莊子が夢の中で蝶となって舞ったが、目覚めると人間としての莊子の人であったという「胡蝶の夢」を想起させるモチーフである。「夢」を連想させる「蝶」が「眠る猫」と「牡丹」という二つのモチーフをつなぎ、画題としての「牡丹睡猫」を構成している。連歌書『随葉集』（慶長八・一六〇三年刊）には、「深見草には、ねこ 蝶 牡丹花下睡猫在心舞蝶とあり⁵」とあって、牡丹の下で眠る猫のねらいは舞い飛び蝶にあるとしている。蕪村の句の猫は、眠るかどうかより、色彩の方に注目している。また、「牡丹・猫・蝶」は画題としては花鳥画に属しているが、「しろがね」や「こがね」といった金属感覚を用いている点から見ると、蕪村が金碧障壁画から発想を得たと読み取れる。画家としての蕪村が、花鳥画と障壁画を多く手がけていることから、蕪村のこの牡丹の句は、花鳥画からの題材に障壁画の配色を加えて、蕪村独特の色彩感覚が反映していると思われる。

4－iv 牡丹の句における仏教の受容

「閻王の口や牡丹を吐かんとす」（『落日庵』）から、仏教の受容について考察を試みる。藤原定家の『明月記』（寛喜元年・一二二九）四月十五日条に「牡丹の花を折りて仏前に供す」とあり、仏前に牡丹の花を供えたことから、鎌倉時代にはすでに仏教と牡丹が繋がっていたことがうかがわれる。「志度寺縁起」のうち「阿一蘇生之縁起」では、閻魔庁の庭に牡丹のような花が描かれている。縁起文には「牡丹に似たる花あり」と記されており、絵画表現を見ても、蕾や花卉の重なった花で、牡丹を想起させる。蕪村の「閻王の口」の「閻王」は閻魔大王で、仏教における地獄の王である。蕪村は牡丹と仏教とのつながりを意識して念頭に置いたからこそ、炎のように燃え立つ牡丹が閻魔大王の口から吐き出されるという幻想を抱いたのであろう。

5. 晩年の蕪村と理俗論

主に蕪村が残した書簡から、蕪村の晩年の心境を推察する。現在残っている書簡のほとんどは蕪村晩年のもので、その内容の多くが普段の用事や句会の添削の応答である。蕪村の書簡からは、蕪村の生活実態を読み取ることができる。

例えば、安永五年（一七七六年）四月十五日付の霞夫宛書簡に、「（略）右長病家内之困窮、言語道断ニ候。御察被下候而、きぬ地面料等も御取集、早々御登被下度候⁶」とあるように、蕪村は自分の病気で家庭内が困窮していることから早く送金してほしいと記している。蕪村が職業画師として画業によって支えようとした生活であったが、当時は金に困っていたことが窺える。

⁵ 木藤才蔵『古典文庫第四三二冊 随葉集』『随葉集増補大全巻第二・夏部・四月の詞』、昭和五十七年九月、古典文庫、六十五頁

⁶ 大谷篤蔵・藤田真一校注『蕪村書簡集』、平成四年九月、一二五頁

安永五年六月二十八日付霞夫宛書簡⁷と安永六年五月二十四日付正名・春作宛書簡⁸によれば、晩年の蕪村は体の不調と愛したひとり娘の婚姻問題に悩まされて、また生活のために画業に追われ、句会も休まねばならなかったことを窺い知ることができる。心身ともに急激に疲労した時期に詠まれた「寂として⁹」などの牡丹の句は、そうした心をよく反映している。

次に、牡丹の句の創作と離俗論とのかかわりという視点から、蕪村における牡丹の句の受容と革新について考察する。蕪村の離俗論は「俗を離れて俗を用ゆ」と主張されたものである。

「俗」は用語の俗と素材の俗をさしている。蕪村は、牡丹の句で日常的な言葉を用いて、「閻王の口や牡丹を吐かんとす」と詠んだ発句の如く強烈な印象を与えた。また、「天の一方」¹⁰や「虹を吐く」¹¹といった作品からも、牡丹の並々ならぬ風格を感じ取った蕪村が、俗語を用いながら、俗を超える理想美を描き出して、そこに離俗の理念を託していることがわかる。

蕪村の牡丹句は従来の牡丹句における花の王や富貴の花の形象を受け継いで、豪壮華麗な牡丹を詠み、その影響下にありながら、そこを脱して、新たな表現を発展させ、牡丹の形象を革新している。尾形侑によると、「牡丹散てうちかさなりぬ二三片」の句は牡丹の移ろいに着目した最初の句である。散る風情を哀惜した平安歌人の美意識につながっていて、牡丹に対する美意識の変革ということになる¹²。

蕪村は牡丹の滅びの美しさを見せている。「牡丹散て」という表現からは時間的経過が感じられて、蕪村の細かな観察を伺い知ることができる。

6. 蕪村発句の俳壇への影響

最後に、蕪村の門人たち、子規とその一派が詠んだ牡丹の句を考察し、蕪村の牡丹句が俳壇に与えた影響を明らかにしたい。後の牡丹句が蕪村からどのような影響を受けたのかについて検討する。

⁷ 大谷篤蔵・藤田真一校注『蕪村書簡集』、平成四年九月、一三八頁

「ことに三十日計已来右の手しびれ候て、中風歟とおどろき、薬を立かけゝ用ひ申候」

絵筆をもつ身の命でもある右手がしびれて、中風かと思って薬を使う。

⁸ 大谷篤蔵・藤田真一校注『蕪村書簡集』、平成四年九月、二〇〇頁

「むすめ事も、先方爺々専ら金もふけの事のみにて、しほらしき志し薄く、愚意に齟齬いたし候事共多候ゆへ、取返申候。」

先方の親が専ら金儲けだけの強欲人で、むすめは先方の家風に馴染まなくて、(半年も経ぬうちに)むすめを引き取ってしまった。

婚家から実家の父親の一存で娘を取り戻すこと、当時の離婚形態としては異例に属する。

⁹ 「寂として客の絶間のぼたん哉」、尾形侑・森田蘭編『蕪村全集 第一巻 発句』、平成四年五月、講談社、二五一頁

¹⁰ 「広庭のぼたんや天の一方に」、尾形侑・森田蘭編『蕪村全集 第一巻 発句』、平成四年五月、講談社、五七一頁

¹¹ 「虹を吐てひらかんとする牡丹哉」、尾形侑・森田蘭編『蕪村全集 第一巻 発句』、平成四年五月、講談社、四四八頁

¹² 尾形侑『蕪村の世界』平成九年二月、岩波書店、一六七頁

明和六年（一七六九）五月十日に紹波亭の月次句会¹³での兼題が「牡丹」で、その頃から蕪村一派に牡丹ブームが巻き起こった。蕪村の弟子、門人几董や道立などが詠んだ牡丹の句が夜半亭門人（蕪村の門人）の牡丹句として残っている。例えば、几董の「五分かくる真昼の蝕や白牡丹」（『晋明集二稿』）と『葉隠れに暮見ゆ暮の牡丹哉』（『晋明集二稿』）の句から作者の花への細かな観察が窺える。

子規と、その一派の牡丹の句については、明治時代、子規が『松蘿玉液』と「牡丹句録」に、蕪村の牡丹の句に感銘を受けて、自らも牡丹の句の創作を試みたことが見られる。例えば、子規の「二片散って牡丹の形変りけり」（「牡丹句録」・明治三十二年）は、牡丹の様子にじっくりと注目しているが、蕪村の「牡丹散つてうちかさなりぬ二三片」の句が念頭にあった句であろう。子規門下の高浜虚子が詠んだ牡丹句である。虚子の「白牡丹といふといへども紅ほのか」（大正十四年）は、白牡丹をよく眺めると微かに紅色がさしていたことを詠んでいる。牡丹を写生的に詠んだことは子規写生からの影響を受けている。白牡丹を凝視しほのかに紅を秘めていることに気づくのは緩やかな時間の推移が感じられて、牡丹の花の様子をよく観察したことによる発見であろう。花そのものを詠むために、細かな観察をしたことが、蕪村からの影響である可能性は否定できないであろう。

7. 終わりに

画家で俳人の蕪村が詠まれている牡丹の句は、牡丹の伝統的な形象にこだわることなく、新たな表現が発展している。蕪村が詠んだ牡丹は豪華な花だけではなく、滅びの美しさを感じた花である。蕪村の牡丹の句には、漢詩文の翻案や、南宗画と障壁画の二種類の画風の自由な運用、仏教への意識が見られる。蕪村の牡丹の句は花そのものを詠んで、細かい局所的な観察もある。蕪村の門人たちの句から、子規一派の牡丹句を見ると、細かな観察の点は、蕪村からの影響があることが推測される。子規の写生は西洋絵画の影響を受けているが、蕪村を通して東洋絵画の影響を受けていたのではないかと思われる。

付記

本稿は宇都宮大学大学院地域創生科学研究科地域デザイン科学専攻多文化共生プログラムに提出する修士論文をもとにしている。

参考文献

（俳諧に関するもの）

尾形仂『蕪村の世界』平成九年二月，岩波書店。

¹³ 「月並句会」は次のように定義されている。

「俳諧の宗匠が毎月、兼題（前もって出しておく題）によって発句を集めて句会を開き、高得点句をまとめて出版する。」（斎藤慎爾 ほか『現代俳句ハンドブック』，平成七年八月，雄山閣，二〇四頁）

尾形 侑・森田 蘭編『蕪村全集 第一巻 発句』, 平成四年五月, 講談社.

大谷 篤蔵・藤田 真一校注『蕪村書簡集』, 平成四年九月, 一二五頁

清水 孝之「蕪村の花鳥画と俳諧——牡丹と紫陽花——」昭和五十一年三月, 『比較芸術学研究 第6集 芸術とジャンル』, 美術出版社.

高橋 庄次「蕪村と障壁画」, 『連歌俳諧研究』昭和四十二年九月, 一九六七卷三十三号, 九～十八頁, 俳文学会.

高浜 虚子・河東碧梧桐著・伊藤 整ほか編『日本現代文学全集 高浜虚子・河東碧梧桐』「季感に就いて」, 昭和五十五年五月, 講談社.

栗山 理一「蕪村の世界」, 「連歌俳諧研究」昭和二十八年十月, 一九五三卷五号, 一～八頁, 俳文学会.

山本 正男『比較芸術学研究 第六集 芸術とジャンル』, 昭和五十一年三月, 美術出版社.

暉峻 康隆・川島 つゆ『日本古典文学大系五八 蕪村集 一茶集』, 昭和三十四年, 岩波書店.

田中 善信『与謝蕪村』, 平成八年十一月, 吉川弘文館.

藤田 真一『蕪村・俳諧遊心 近世文学研究叢書』平成十一年七月, 若草書房.

藤田 真一・清澄典子編『蕪村全句集』, 平成十二年六月, おうふう.

山下一海『蕪村の世界』, 昭和五十七年十一月, 有斐閣.

山下一海『芭蕉と蕪村の世界』, 平成六年七月, 武蔵野書院.

山下一海『俳句の歴史 室町俳諧から戦後俳句まで』, 平成十一年四月, 朝日新聞社.

日本文学研究資料刊行会『日本文学研究資料叢書 蕪村・一茶』, 昭和五十年六月, 有精堂.
(牡丹に関するもの)

青木 誠一郎『角川俳句大歳時記 夏』, 平成十八年五月, 角川学芸出版.

小林 祥次郎『季語遡源』, 平成九年六月, 勉誠社.

中尾 佐助『花と木の文化史』, 昭和六十一年十一月, 岩波書店.

川口 久雄校注『日本古典文学大系七二 菅家文草 菅家後集』, 昭和四十一年十月, 岩波書店.

西山 松之助『花と日本文化 西山松之助著作集 第八巻』, 昭和六十年六月, 吉川弘文館.

寺山 宏『和漢古典植物考』, 平成十五年三月, 八坂書房.

萩原 義雄「牡丹考——『南総里見八犬伝』における注釈事項をともに」, 平成四年三月, 「駒沢大学北海道教養部研究紀要」二十七巻, 三十三～六十八頁, 駒沢大学.

三之丞 伊藤 伊兵衛著・伊藤 伊兵衛著・加藤 要編, 『東洋文庫二八八 花壇地錦抄・草花絵前集』, 昭和五十一年四月, 平凡社.